探検・探査

第５号

（1997 年 7 月 6 日）

横浜市立大学　探検・探査の会

探検・探査の会　会報誌５号　目次

ＯＢを誘ってください・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・会　長・・大野　正夫・・ 1

北ベトナムの文化風土について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・熊沢　　憲・・ 2

メキシコ・中米自転車旅行・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・穂積　拓夫・・ 7

一つのアルゴリズム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・伊藤　　源・・ 9

無　題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・佐藤　修史・・12

出会い・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・関口由佳里・・13

「嘘つきになった私」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・榎本　幸恵・・13

生まれた地を訪れて　－ 旧満州の旅 －・・・・・・・・・・・・・・・宮崎　捷二・・15

前三ツ頭登頂記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・河合　武臣・・19

'96. シッキム・ムスタンの旅・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・田村　康一・・23

探検部の思い出・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・小林　　剛・・26

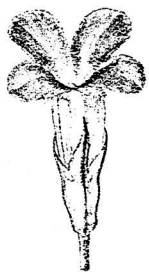
会員近況紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29

横浜市立大学探検探査の会 総会報告 ・・・・・・・・・・・事務局・・・・・・・・・・31

会計報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34

会員名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

編集後記



ＯＢを誘ってください

会長　大野　正夫

探検・探査の会ができて５年が立ちましたが，海外遠征の話などもあり，活動が途切れなかったことを感謝します．私の学生時代は，探検部の創設期で，京都大学に探検部があり，関東に横浜市大探査会ありと粋がっていました．このようなOBと現役が集う会も，また，まだよその大学にはないと思います．

思い出話になりますが，私達の学生時代の昭和３４年は，まだ日本は高度成長期にはなっていず，横浜市が貧乏で，市大を身売りしようという時でした．建物は木造の御ボロ二階建で，飛び跳ねたりすると，床が抜けるのではないかと心配な建物でした．鶴見脱線事故で，突然亡くなられた三枝博音先生が，文理学部長をしていて「大学の存在意義」の熱弁をふるい，学生達は「王将」などを歌っていました．三枝先生が白髪の髪を揺らせて，「貴君達は,大学を出る時に学舎を振り返って,涙が出るほどに大学生活に熱中せよ」と言われた言葉が，今でも耳の奥に残っております．私は勉学に熱中する時間がないほど，探検部の活動に熱中しました．ものがなくて，会社を廻り現物援助をお願いし，プラステックの食器，フィルムなどをもらいました．その頃は食料事情が悪く，インスタント食品はなく，カレーはカレー粉を焼きました．これにはテクニックがあり，毎回違った味のカレーでした．ある時は，失敗して「今晩はカレー汁」とメニューを変えたりしました．パンは黴びるし，野菜は腐るし，石油がこぼれて臭い飯になり，二週間くらい合宿に行くと，帰って下痢をしていました．母に「あまりいっぺんにたくさん食べるからだ」と注意されたりしました．下山の最後の日の話題は，いつも帰って何を食べるかということでした．

この会誌に登場する宮崎，河合君達が入ってきて．急に 食事のメニューが豊かになり，歌声喫茶で覚えた歌を，我々先輩に披露し，「う～ん，時代が変わった」と同僚，先輩はオロオロしました．それから女性パワーが加わり，探検部時代になり，華やかな雰囲気が漂い始めた頃，人前では涙を流せず，「少し早く出てしまうな～」と寂しかったが，　「大学時代に，悔いはなし」と校門を背にしたことが思い出されます．

卒業式には，先輩の医学部の伊東さんも一緒でした．医学部の卒業生代表は，首席がなる慣習があり，我々のリーダー伊東さんが「あるいは～」という期待と「まさか～～ありえない」という思いで迎えました．会場に「～以上総代・伊東芦一～」いう声を聞き，数日前の最後の合宿で「おめーら～」と言っていたのに．伊東さんが静々と壇上に上がって行く姿は別人に思えました．翌年，先輩ではあるが，こまめに作業をし，我々の尻を叩き，草木の名前を教えてくれた博物派の寺島さんも，やはり，医学部総代でした．先日，神奈川県立子供病院の泌尿科部長をしている寺島さんに電話をしたら，「大野～，山に行ってるか．俺は行ってるぞ．看護婦さんと～．ここはそんなに忙しくないんだよ」～昔と変わらない声が返ってきました．

こんな先輩が，たくさんいますので，ぜひ，先輩と連絡を密にして，この会を盛り上げて下さい．

北ベトナムの文化風土について

熊沢　憲（昭和60年卒）

はじめに

仕事の縁あって昨年はベトナムに長期間滞在することになった。滞在期間は延べ9ヶ月であったが、日本にいる間もその仕事をしていたので、一年中ベトナムのことを考えていたといってよい。

そして北ベトナムは他の東南アジア諸国よりも濃厚な文化的な味わいのある土地であることがわかった。生来の土着文化が現代的な消費文化の中で過去の遺物として扱われ、一般には忘れ去られているのではなく、新しい文化を受け入れつつ変容して、または重層化している感じがする。これは中国の隣国として早くから漢字を習い文字を持った文化を作ってきたからなのか、気候風土に四季のメリハリがあり東アジア的であるためなのか、または卓越した社会主義指導者であったホーチミンが文化についても理解が深かったためかよくわからないが、東南アジア諸国で年の大半を過ごすわが身には楽しい文化風土である。稚拙な文でもその魅力を少しは伝えられるのではないかと思い、筆をとった次第である。

ハノイ

ハノイはベトナムの首都であり、漢字では河内と書く。その名のとおり北ベトナムの大河である紅河がこの地で分岐してデルタを幾筋にも増えて流れてトンキン湾に注いでてる。ハノイの都市景観の特徴は市内に散在する大小の池（その幾つかは公園として景観整備が施されている）とフランス占領時代に形ができた大街区と街路樹による街並みである。

ハノイは、私の知っている限りで、東南アジアで最も住みにくい大都市である。その理由は気候にある。冬はぶ厚い雲が晴れることなく霧雨もやむことなく、寒い。統計を見ると2月3月の月間日照時間は30時間程度である。湿度は年間を通じて80%以上と高く夏には当然気温も高い。しかしこの不快な気候が都市の文化的な雰囲気を醸成するのに適っているともいえる。想像しやすいことであるが、気候が乾季と雨季だけでひどく暑

いか土砂降りかの単調な町を好む風景画家は少ないであろう。

ハノイには画廊が多く、その数は 200 はくだらない。それぞれにお抱えの画家がいるなど特色があり、町の画廊めぐりに飽きることはない。その数は人口や人々の貧しさから考えて、際立っている。その画風は中華文化よりもフランスの影響をより強く感じる。またその題材は農村風景、都市風景、裸婦から革命戦争まで多様である。革命を熱心に描き続ける画家が幾人かいて、その人たちが社会的な名声を得ているところはベトナムらしいといえる。画法は油、水彩、うるし、版画などがあるが、私が注目しているのは世界でも北ベトナムにしかいないと言われている「うるし」で西洋画を描く画家たちである。その数は 30 人程度と思われるが、旺盛な創作活動で質の高い作品を発表している。

紅河デルタ

ハノイにいると陶器や家具、衣類などの雑多な手作りの製品が農村から流入してくるのがわかる。これは他の途上国と同様であるが、その製品の質の高さには目を見張るものがある。これを調べて驚いたのは、製品の多様さとそれを作る工芸村の存在である。技術としては籐や竹の活用や紙を漉く方法、木材への彫刻やうるしの塗り方など日本とは違うがしっかりとしたものである。また紅河デルタでは農村が内職として工芸品を作るのではなく、ある工芸品のみをつくる工芸村（まるで芸術家・職人の集落）が 140 ヶ所ほどあり、そこに今でも延べ 6 万世帯が住んで工芸品を作っているいる。これは日本の過去及び近隣東南アジア諸国にはない規模の活動である。

ドイモイ（ベトナムの市場経済化政策）以前では、国の足りない資金を旧ソ連・東欧諸国に頼っていたが、1989 年までは返す金もないので工芸村の製品を大量に輸出していたとのことである。彼らがこの製品の実用性はともかくとして芸術性を理解していたとはとても思えないので、その状況を想像すると笑いを禁じ得ない。現在工芸村では独自に販売網を確保する必要が生じており、またハノイ近郊には次々に外資系の工場ができてそこに働きに出ればたやすく現金収入が得られると言う状況下で、村の行く

末について苦悩が続いている。

おわりに

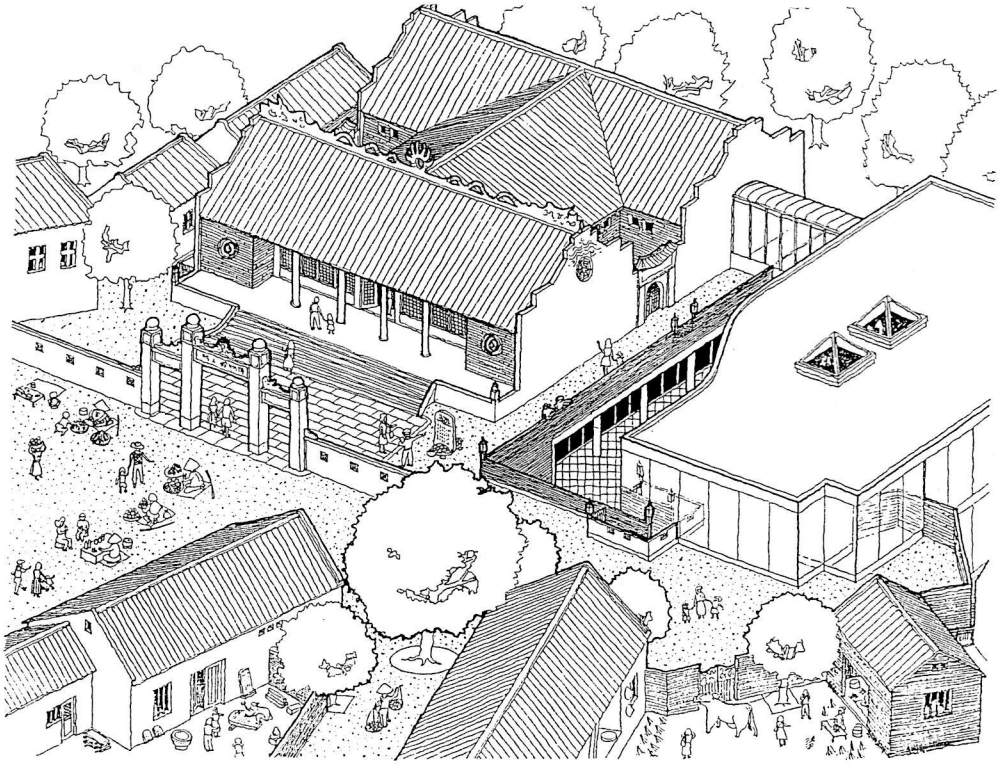
日本の英語名 Japan の由来はフランス語の japon（うるし）であるという。うるしの国から来た者にとって、北ベトナムでその材料により現代文化を表現しようとしているのは驚きであった。私の仕事仲間ではうるし絵を買うのがはやっており、今まで 100 枚を下らない絵を買い付けている。先日縁あって愛知県足助町でベトナムうるし絵展を開き、読売・朝日の地元欄でも取り上げてもらい、好評を博した。ベトナム国外で初めてのうるし絵展だったのかもしれない。

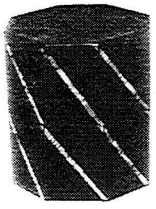
また工芸村については、国連工業開発（UNDP）の資金で調査をおこなった。日本の民俗学者、工芸家、建築家を団員として調査団を構成して、ある工芸村をケーススタディとして選び、その工芸技術を向上させ、情報発信力をつけ、観光客も誘致できる施設を作ることで地域活性化を図るというシナリオを描いた。日本の ODA で実現してみたいと思っている。

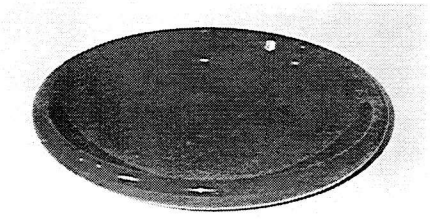
私は学生時代に途上国を放浪したいという欲求を強く感じ、自分自身とその回りを説得する材料として文化人類学を学ぼうとしたが、向学心足らず何も身に付かなかった。いまは都市計画・交通計画のコンサルタントとしていろいろな国で仕事をしながら、自分の興味のある範囲でその土地の食べ物、酒、人間そしてもろもろの文化を楽しんでいる。クラブの先輩そして後輩諸氏のような精力的な探検活動は大学卒業後何もしていないが、最近ではこの程度が身の程にあっているのではないかと考えている。

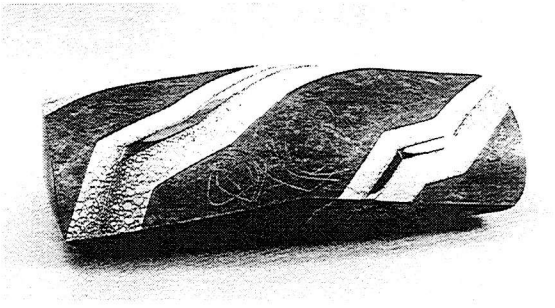
資料説明

1 ページ目上	うるし絵の例
1 ページ目下	工芸品の例
2 ページ目	工芸村活性化のイメージ









メキシコ・中米自転車旅行

穂積　拓夫（1991年入学）

今回、スペイン語の研修及び六年間にわたる探検部での活動の最後を締め括る目的で、１月15日より60日の予定で、メキシコ及び中米を自転車で旅した。

まず飛行機でメキシコシティに自転車を運び、地図を入手し、日本人宿でいろいろな情報を得て、１月17日に東に向かって走り始めた。この日１日だけ、日本人宿で出会った世界一周中の他のチャリダーと走る。

市内は交通量が多く、車が優先で、しかも運転が荒く、自転車は気にも留められない。また空気は薄く、しかも充分に汚染されているので、自転車の通行は困難を究めた。しかし、世界で最も人口が多い都市の一つである割には、意外にすんなりと郊外に抜けることができた。

この日はシティから50km程離れた郊外の町に泊まる。翌日はメキシコシティのある盆地を囲む山脈を越えて 100km走る。

その二日後、高速道路に乗り、高原から低地へと一気に下った。高速道路は一応自転車の通行禁止だが、路肩が広く（一般道には路肩がない所も多い）、料金が日本並に高いらしく交通量が少ない。そのため、国道よりも面白みには欠けるが、安全かつ快適（都市部を除く）で、自転車で走っていても警官も普通はあまりうるさいことは言わない。

その後、メキシコ湾岸のベラクルス州の最も貧しいと言われる地帯を走行中、「強盗がでるのでバスを使え」と警告されるが、その気になれなかった。その日は既に80km暑い中を走って体力を消耗しており、しかももう午後であったことから、とりあえず近くの町に泊まることにした。

翌日、危険を少しでも避けるため、朝元気なうちに危険地帯を通過しようと起床するが、何と周囲は濃霧に包まれていた。いかにも強盗が出そうに思えて嫌だったが、地元民に出発の是非を相談する。とりあえず「国道まで途中で止まらず走り抜ければ大丈夫」とのことであったので、30km/h近い速度で突っ走った。

ようやく国道が見えてきて一安心したときに、速度と距離を計る機器にふと目をやると、何となくなっていた。おそらく、途中の集落に設けられたハンプ（車を減速させるための道路の凸部分）を速度を落とさないでそのまま通過した際に落としたのだろう。旅を始めてから僅か８日目だった私は諦めきれず、危険地帯へ戻って探してみたが結局見つからなかった。

当初「決して止まるな」と言われたせいで、見るものや会う人全てが怪しく思え、つい突っ走ってしまった危険地帯だったが、結局落とし物探しに２度目の走行をするはめとなった。私自身は２度の走行中、何事にも出くわさなかったため、「初めにあんなにとばさなければ良かった」と後悔したが、実際にこの辺りはかなり危なかったらしい。後日、例の危険地帯で強盗に襲われ、蛮刀で切られて10針縫うけがを負ったチャリダーに会った。この辺りでは都市部を除き、蛮刀を農作業用に持ち歩く人が多いので、彼らはいつでも強盗に早変わりできるのである。

２日後、地図上でメキシコが一番狭くなった部分にある海峡を南下する途中、小さな町に立ち寄った。暑くてどうしようもなく、ジュースを飲みにバーへ入ると、「この町から４時間車で奥地に入ったところに住む」という牧場主らと出会った。話しているうちに彼らの牧場についてゆくこと

になり、その日から４日間自転車をお休みしすることにした。

奥地の牧場では、電気・水道もなく、ダニに食われ放題の生活が待っていた。私は彼らと共に、沢を登り、藪を漕ぎ、川を下りながら鹿を追いかけた。しかし私は、風上から鹿が逃げないように追い立てる犬の役目を仰せつかっていたため、いまいち狩りの醍醐味を味わえなかった。但し鹿肉は絶品で、生肉のレモンじめなどもなかなか美味であった。

その後再び自転車旅行を再開し、チアパス州の太平洋岸を低地沿いに進んだ。この辺りは日中非常に暑くなり、何度か軽い日射病になった。きれいな川が多いところだったので、気温の高い昼間は川岸の木陰で昼寝をしつつ走り続けた。

出発から約２週間でメキシコを抜け、グアテマラに入った。以前訪れたことのある高原地帯を避け、今回は太平洋側の低地に進路をとった。この地域は砂糖の生産地であり、砂糖漆の汁を蒸発させる際の灰がたくさん飛んでいたため、それが次から次へと目に入ってとても辛かった。

グアテマラを３日間で走り抜け、エルサルバドルに入った。ここは内戦が終結して間もないため、内戦中に流出した武器を手にした強盗が多いと聞いていたが、昼間国道を走る分には問題がなかった。道もかなり整備されており、非常に走りやすかった。

その後ホンジュラスを１日で通り抜け、ニカラグアに入った。さらに４日後、コスタリカに到着した。コスタリカに入ると、ドライバーのマナーが格段に良くなった。それまでの国々の運転があまりにひどかったので、非常に運転しやすく感じられた。

コスタリカ入りして５日程後、1200mくらいの高低差のある峠を登り、中央盆地に入り、今回の旅の目的地である首都サンホセに着いた。メキシコシティから自転車で約40日、2700kmの行程であった。幸いなことに強盗・交通事故にもあわず、それどころかパンク一つしないでこの自転車行を終えることができた。私の知る限り、この時期に５人程の日本人チャリダーが走っていたが、その内一人は強盗に遭って旅を中止し、他の一人は交通事故にあったということだったので、私の旅は非常に幸運に恵まれていたといえるだろう。

サンホセからさらにパナマに行っても良かったが、メキシコでどうしても行きたい場所があったため、ここで南下の旅は終わりにし、飛行機でメキシコに自転車を運んだ。今度はメキシコシティから西へ向かって進み、１億匹もの蝶が群生するという森、また沼や川がそのまま温泉になっている所を自転車で訪れた。約10日後、メキシコシティに戻り、小旅行を終えた。

最初のメキシコ～コスタリカ間の自転車行で、目的地のサンホセに着いた時、思ったよりもあっけなく着いてしまい、しかもゴールが都市であることからか、登山で山頂に立った時のような達成感は感じなかった。しかし、帰国後旅を振り返ったり、地図を眺めたりしていると、やはり満足感がこみあげてくる。昨年の夏合宿の釧路川筏下りもそうであったが、あとからじわじわと目的を達成した喜びを感じている。

今回のこの旅で、自転車旅行の良さを知ってしまったわけだが、同時に６年間探検部に在籍していて初めて、「もう満足」と思えるようになった。こういった気持ちで卒業できて、非常に嬉しい。

今はもう満足といった感じではあるが、いつか機会があったら方々の山に登りつつ、コスタリカから先、パナマ、南米、さらにはアフリカへと自転車で旅してみたい。

一つのアルゴリズム

伊藤源（'89入部・翌年退部）

探検とは何かという入力が、異界で出力を果たそうとしている。出力もあの入力と同様、解くためではない問いであるべきである。以下は、個々人が世界と関わる際のアルゴリズムである。そんなものが存在しないことを承知で吹いてみる。

1、問題を明確にする。

安易にやると、問題とともに自分がぼやける。しかしこのとき、その人は全てを客観視できる。安易にせずに追い込めば、次のいずれかが得られる。

イ）その答・・・我田引水、自画自賛
これは分析可能な通常の問題（に過ぎない）

ロ）ジレンマ・・・努力の報酬
高度なバランス感覚を要する問題

2、ジレンマを鏡と見立てて＜鏡像、実像＞のペアを作る。

3、実像と鏡像が混じり合うべく行動し、このとき鏡は武器（概念）と化す。

4、1～3は、「結果ではなく過程こそ大事」等の言明を鏡像とする実像をなし、このときの鏡が「賦に落ちる」と言った類の理解と化す。

ここで切りますが、これでは稲田の野菜炒めの残り汁。

付　記

何かをやろうとする当事者の入力は科学的入出力関係（法則）、出力は当事者の目的に結びつく。当事者は出来るだけ精度のいい理論を選択するであろう。この選択に際し当事者は、自分の目的を明確に認識する必要がある。当たり前のことである。私は、この「当事者の選択機構」を明らかにしたい。一見、最もつまらない傍観者は伊藤であるかにみえる。が、違う。私（当事者）の目的は「知るということを理解すること」であり、その中でも、”頼もしい当事者”の視点というものが最も面白いと思うからである。ゼネラリストの視点といってもよい。おいおい、説明していく。

ミーティング合宿の論題「探検とは何か」が引き金となって、それから4年後に、「完全なるものを完全であると認定するのは自分である」ことに気づいた。それまでの自分は、自分の外側に何か究極的な真理が広がっていると信じていた。しかし、それを究極とするのは自分なのだ。それに気づいたのである。材料は、民族調査の会話であった。考え得る調査手段として、ロールシャッハテストなどいろいろあるのであろうが、そういった調査の理論的枠組み自体が調査対象に影響を与える。つまり、ロールシャッハテストの枠組みでもって、対象に問いかけをしているのである。かつて田村さんが、「日本で育った日本人が民族学をやるなら、日本で。」と言っていたことも、日本人の視点という”枠組み”がその分析に入り込んでくるということであったのだと思う。今思えば当然のことだが、自然科学でも全く同様である。ある枠組みでもって自然に問いかけるのだから。そして、どの枠組み

で問いかけるかは私が決めるのである。4年もかかった。恥ずかしいが、仕方ない。

さて、これに気づいて「安易に分かったなんて言えないな」と反省すると、「物事は色々な角度からみよ」となるが、色々な角度から見るためにはゼネラリスト的バランス感覚を要するのである。このバランス感覚でもって当事者はより精度の高い理論を選択し、目的を達しようとするのである。このバランス感覚とは何なのか？　おそらく、「適当にやればいいんだよ。いや、だからこそ若いときはアンテナを多方面に延ばせ。しかし、あんまり散漫すぎるのも良くないぞ」ぐらいにしか言いようのない、表現しきれない”何者か”なのであろう。言いたいこととその表現がずれることは常である。言葉通り受け取って、「適当って、どうやるの？」なんてのは、聞く方も聞く方だが、聞かれてうろたえるようでは眉毛を失っても仕方がない。

ならばと、「言いたいこと＝その表現、ではない」ということを逆手に取って、色々な角度からの表現を織り込むことで、言いたいことを浮き彫りにするのは、よくあることである。簡単な情景描写なら、その場にあるものを列挙していけばとりあえずはいい。色々な媒体で色々な手法があるのであろうが、その中でも特に、ジレンマを産むような表現のペアが面白い。

例えば、人妻について考える。＜社会の一員としてのモラル、自分の欲求＞という表現ペア（共に人妻の表現であり、二つ合わさってジレンマを構成している。）でもって稲田は勃起するのであり、作者はそのチンコをみて「そうそう、俺の言いたかったのはそれなんだ」と喚起するのだ。稲田は射精という目的のためにジレンマを入力するのである。体に精子が溜まったから、などという科学的説明ではなく、ジレンマが生じた（だけ）なのである。なんか脱線してきた。

別の例を挙げると、食べるという行為である。この場合のジレンマとは、＜野蛮、生きるために仕方がない＞である。このジレンマを抑え込み、安心して（？）食べれるようにするための技が、「いただきます」という作法である。

このように、ジレンマを入力と考えて説明した方が、納得できることもあるのである。この入出力関係をなんと利用できないかと考えてみようというのが上のアルゴリズムである。ゼネラリストのアルゴリズムのつもりである。

まずは定義から。スペシャリストとは、解ける問題を解く人・頑張れば誰でもそれが出来るようになる領域に座る人、と定義する。通訳師、情報処理師などである。また色々な領域を見渡すにしても、事務的に見渡すのであれば、一見ゼネラリストにみえるスペシャリストである。例えば、土木現場監督（例が貧弱だが）である。一方、スペシャリストの反対としてゼネラリストがあるのだから、ゼネラリストとは、解けない問題をなんとかする人である。解けない問題とは、ジレンマそのものであると考えよう。つまり、通常の方法では解決できない問題・ジレンマを、うっちゃることができる人をゼネラリストという。上の食事の例で言えば、ゼネラリスト氏は、いただきますという約束事を導入し、しちめんどくさいジレンマをうっちゃるのである。そう考えると、ゼネラリスト＝ある程度チャランポランな人、という直感に合う。ゼネラリストはチャランポランであるが、チャランポランはゼネラリストではない。ゼネラリストは、問題をなんとかしようとする当事者である。チャランポランに見えるのは、うっちゃりという卑怯な手（コロンブスの卵）を使うからである。

アルゴリズムを説明する。問題に突き当たったとき、まずそれがどんな問題なのかを把握する。把握しきれたら大抵、努力により解ける。その解答に満足がいくなら、万事ＯＫ。漠然とした問題を解けるような形に直すのだから、解けるに決まっている。そんな作業はスペシャリスト向けだ。科学的思考法が身についた人ともいう。なかなか、滑稽ではある。今考えたいのは、これとは違う。いわば、悩みに近い問題、普通にやっていては解けないだろう問題をどうするか？である。（臨機応変、宗教、

センス、どれもつまらない）。まず、問題を把握するとき、いろいろなfactorのうちで特に、ジレンマをなすペア＜A，B＞を見つける。ジレンマ自体を鏡とみたてて、きれいに対をなすようなA，Bのペアを見つける。

きれいな対とは例えば、＜社会、個人＞、＜ボケ、ツッコミ＞、＜本音、建て前＞、＜おしべ、めしべ＞、＜光、陰＞、＜抽象、具体＞、＜一般論、例題＞などである。

次のような対はだめ；＜青森、果物＞、＜飲み会、上大岡＞、＜ゴム、薄い＞、＜小林、屋久島の朝食＞などはだめ。連想ゲームをやっているのではないのだ。対にして、ジレンマ、ギャップを織りなさねばいけない。

きれいなジレンマペアを見つけたら、これを一緒くたにまとめて封印するような技を考える。通常、ジレンマペア＜A，B＞に出会ったら、AかBのどちらかを諦めてまたは犠牲にして、ジレンマ自体を成り立たなくするのであろう。例えば、性欲を犠牲にしてモラルをとることによりジレンマ自体を解消するように。そんなのつまらない。だから、なんとか技を考えないといけない。モラルと性欲をぐちゃぐちゃに混ぜ合わせて封印する技を。毎月28日をスワップの日とするのはどうだろうか？「僕は君を100*(30日-1日)/30日=97%愛している。しかし残り3%は自身がないんだ。」と言えばいい。（いや、弱いなあ。封印技「いただきます」に匹敵するぐらいのはないですかねえ）。

ひとたび技を編み出せば、それはすぐにあたりまえの常識になる。その技のスペシャリストは湧いて出てくる。素人には登れなかった山が観光地になるかのように。つまり、技というのは編み出すまでが楽しいのであって、出来上がってしまえばなんの味もないとも思える。技編み出しのこのプロセスは「結果ではなく、過程だ」という一般論（？）の一例であり、ここに＜一般論、例＞の対が現れ、アルゴリズムが完了する。

探検とは何かについて答えようとするのなら、自分が何を見たいのか、何をしたいのか、何を分かりたいのか、自分は何者なのか、などについて考えざるをえない。探検とは何かという、「そんなん、解けるわけないだろー」とすぐに分かるはずの問いが、思考（試行）回路を発動させ、自分自身（自分がしたいこと）というジレンマを得ることでうまく機能し、積極的な当事者を出力した。当事者は、ジレンマを行為で抑え込むために、技を編み出さざるを得ない。がために積極的なのだ。

探検とは何か、に対する素朴だが現時点での出力です。全世界の情報を手の平サイズに圧縮すれば、それが神様の形式だと考えたのが始まりだった。しかし今は、神様とはいただきますと同様、ジレンマ封印技にすぎず、そんなこと真剣に考えるなら、スワップの日を提唱する方がいいに決まっている。

蛇　足

ほぼこう言ったことを理論化し、物理の基礎理論を書き直すことが、博士論文のテーマです。”見ること”にどうしようもなく入り込んでくる自分自身というジレンマを無視・棚上げする宣言、それのみから科学を導く。”自分”が限りなくぼやける代わりに、客観性を獲得するのです。哲学なんかではなく、使える方法論として考えているのです。

＊＊おわり＊＊

無　題

佐藤修史（1987年入学）

元朝日新聞編集委員の藪下彰治氏が五月、自身の闘病記録「両足をなくして」（晶文社）を著した。氏は在職中、糖尿病をきっかけに網膜、腎臓、心臓を病に侵されたあげく、壊死した両足を切断するはめになった。いまは「車いす記者」と呼ばれるフリージャーナリストだ。

この本を読んだのがよくなかった。小心者の私は、すぐにわが身を思った。そう言えば、このところ妙に疲れやすくて体調がすぐれない。一昨年まで二．〇だった視力は〇．七まで下がった。便秘や下痢に日々悩まされる。

奈良在勤の二年前には、脳の命令を神経が伝えにくくなる「ギランバレ症候群」にかかった。二十日間の自宅療養中、最悪時には両手の握力が５まで下がり、缶ジュースのふたも開けられなくなった。広島在勤の昨夏は、原爆忌の未明に原因不明の腹痛に襲われ、救急病院に駆け込んだ。

私の体にも異変が起き始めている……。

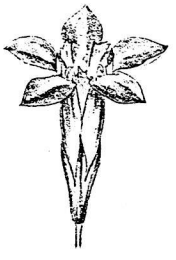
身も心も清らかなまま大学に入学した一九八七年から十年が過ぎた。就職したのは九三年十月。酒も飲まないしまだ二九歳だ。学生時代のいいかげんな生活のつけが回ってきたのか、連日午前様になる激務や運動不足がたたったのか。

そんな不安に追い打ちをかけるように、今春の社の健康診断で心電図に異常が見つかり、診察を命じられた。医師は「脈拍が極めて遅い。ペースメーカーを入れる必要があるかもしれない」などとすました顔で言った。

健康のため、毎日スポーツジムで汗を流す上司に、「ほかにやることないんスか」と憎まれ口をきいていた私も、医学の教養がないだけに「心臓が悪い」と聞くと、すぐ「死」に直結するような想像をしてしまう。

とにかくもっと検査を、ということで胸に専用の装置をとりつけ、あらためて二十四時間連続の心電図をとらされた。結果はまだ出ていないが、ちょっと歩いては胸に手を当て、心臓の打つ音を確認してしまう毎日である。

が、少なくとも私の知る範囲では、探検部ＯＢのみなさんもおそらく、健康に留意して規則正しい生活を送れる人間ではないはず。冗談ぬきに、明日は我が身ですぞ。



出会い

関口有佳里（1996年入学）

大学に入学してからこの１年間、自分でも何をしていたのかよくわからないぐらい、あっという間に過ぎてしまいました。授業を一生懸命受けてたっていうわけでもないし‥‥。

スケジュール帳を見ると、あーこんなこともしてたっけ、となんとなく思い出すけれど、一番はっきりと思い出せるのはやっぱり探検活動のことなのです。楽しかったことも、辛かったことも。「もーっ、どうしてこんなことしなくちゃならないのー」と思う瞬間が幾度となくあったけれど、無事に帰って来られれば、それもなぜか良い思い出と化してしまうし、写真など見た日には「もう二度と行かない」と決めた沢でさえ、「あっ行っちゃおうかなっ」という気分になってしまう。

それもこれも探検部に入ったからこそ、出会えたことや人や物が私を引き付けているんじゃないかと思ったりするのです。

よく思うことだけれど、出会いっていうのはいつも偶然でとても不思議なものです。思えば私と探検部の出会いもあまりに偶然でした。あれは高三の夏休み（ハハハ）、学校見学に来た私は、探検部のボロボロの横断幕を見つけて、「これだ！」と思ってしまったのです。他にも探検部のある大学はあったけれど、やっぱりあんなものを作ってしまった市大探検部でなければだめなような気がして、夏休み以降は「探検部²」と思いながら勉強しようとしていました。‥‥なんかかわいそうな受験生でしたね‥‥。

私は道を間違ってしまったのかもしれない、と思うこともないわけではないけれど、今はあーよかったなーという気分です。

あの横断幕がなかったら、市大にも来てなくて探検部にも出会えていなかったかもしれないんだから。

これからどんなものに出会うんだろう。楽しみでもあるし恐いような気もします。あんまりヘンなものにはあいたくないんだけどねぇ。

「嘘つきになった私」

榎本幸恵（1996年入学）

私は暇を嫌う人間だ。とにかくボーッとしている自分は許せない。スケジュール帳は埋まっていないと気がすまない。私はそんな慌ただしい人間である。そういう訳で今年も私は動きに動いた。

どれ位動いたかというと、大学に入学してからの10ヶ月で劇団の芝居に３本出演し、探検部の合宿６つ（だと思う）に参加し、週３回バイト先の塾で姉貴分を勤めた。この10ヶ

生まれた地を訪れて 旧満州の旅

1965年卒　宮　崎　捷　二

自分の生まれた「満州」（現・中国東北部）の地とはどんなところなのだろうか。知らない、覚えていない。奉天（現瀋陽市）で生まれ満４歳で葫蘆島から船で日本に引き揚げてきたと聞かされてきたが。どこで生まれようと良いとは思うのだが。

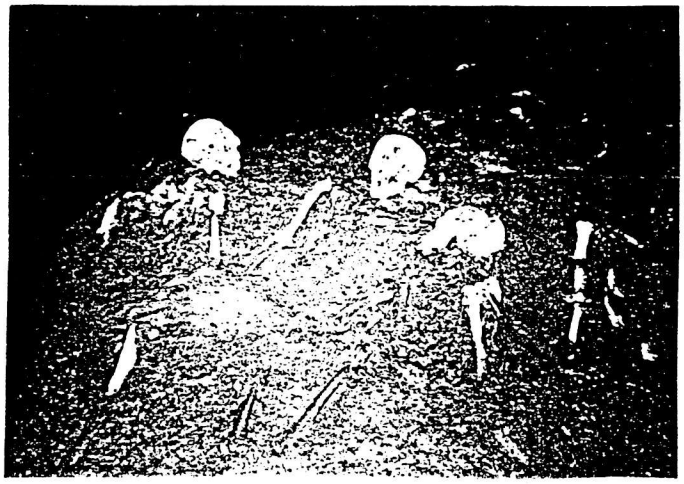
７年前、1990年に中国天山山脈トムール峰登山隊（第１次）に加わった。そして喀什、烏魯木斉、吐魯蕃とシルクロードの一部も歩いた。それこそ、そこは中国であったたが西北部のウイグル自治区。帰り際に北京から中国東北部に飛ぶことも考えない訳ではなかった。

ＴＶで放映された「大地の子」を多少なりとも自分にダブらせて観た。中国残留孤児になっていたとしたら、今頃はモンゴルの広大な草原を馬で駆け巡っていたかもしれない自分を、願望を含めた想像をしたりして。

1996年夏、「満州」を旅するチャンスを得た。自分の所属する日中友好協会伊勢崎支部の仲間たちと。今回の旅は単なる観光旅行ではなく、自分たちで組み立てた「旧日本軍の侵略の爪痕を訪ねて」の旅だった。大連～撫順～瀋陽～長春～哈爾浜～北京と移動した。

累々たる屍そのままに ―― 虎石溝万人坑

８月19日（月）の記録は「大石橋市は 2.000年の歴史のある町、人口70万、旧日本軍と企業がこの地で中国人を強制労働に駆り立てマグネサイトを採掘、死んだり衰弱した人達を埋めた場所が万人坑。17.000人が犠牲になった。万人坑は３カ所ある」と。採掘の跡を示す白っぽい裸の山が続く。今でも掘られているという。12時14分、虎石溝万人坑に着く。正面右手には……バスは小高い山間部に入る。李君女史の説明で

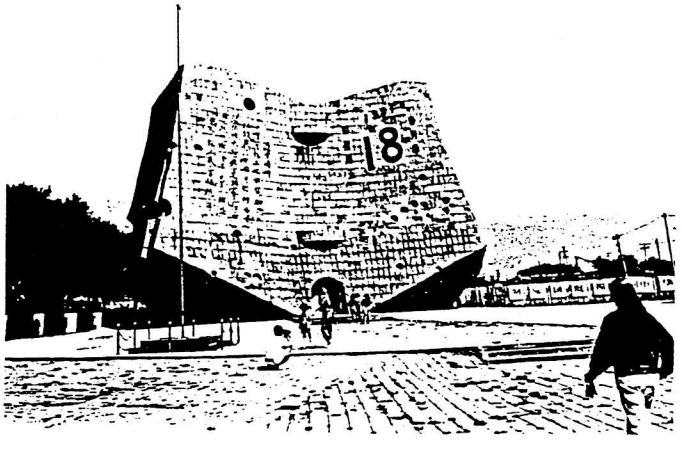


虎石溝万人坑　白骨が層をなしている

『鉄證』と刻まれた大きな石碑あり。『錆び付き風化してしまう事のない証』という意味だという。遺骨館には中国の子供達の教育の場となっている旨の『営口市中小学校徳育基地』の標示あり。館内には累々たる屍がそのままさらけ出されている。頭蓋骨からつま先までの物言わぬ人骨が何層にも埋められている。地面に接した何カ所かの電球が、生き埋められた証拠の針金の巻き付いた腕の骨や砕かれた頭骨を鈍く照らす。説明する館長さんの呻きにも似た悲痛な声は、旧日本軍の残虐な悪行を告発する。せめてもの罪滅ぼしと不再戦の誓いを込めて、我が訪中団の花輪を供える。『中国の旅』の著者・本多勝一氏の献花が一年前の訪問を示していた。遺骨館のすぐ脇にも人骨発掘保存の建物が有る。陽光の下を歩く我々の足の下にも現に埋まっているのだという。南京大虐殺は作り話だとか言って認めようとしない日本の関係者らは、ここも認めようとしないのだろう。…… 両側がポプラ並木の瀋撫高速道を経て人口 230万の撫順市に入る。右手にいきなり鉄工場が出現し、何本もの太い煙突から黒煙が吐き出されている。左手は商店や鉄工労働者の住宅という7階建前後のビル群や、まるでトンボの様にＴＶアンテナが林立する煉瓦作りの平長屋群。木も生えた小高い山が連なり迫って来た。ボタ山だという。採掘80年の歴史の所産なのだ。日暮れも手伝ってか全体がくすんでいる。空気汚染の公害がひどいと言う。……

仕組まれた満州事変勃発の地 ―― 柳条湖

8月21日（水）の記録 …… バスは瀋撫高速道を一昨日と逆に走って瀋陽市内に入り、10時40分、瀋陽『9.18事変』陳列館に着く。1931年9月18日、関東軍が仕組んだ鉄道爆破を、中国側の破壊活動だ言い掛かりをつけて起こした満州事変勃発の地柳条湖だ。門を入ると左手には、『日本帝国主義統治下的瀋陽専題展覧』と掲げた平屋建ての陳列館。関東軍の陰謀による張作林爆殺事件をはじめとする数々の旧日本軍の蛮



柳条湖事変記念塔　満州事変勃発の地

行が、写真・人形・武器などを用いて告発されている。館の外は眩しい世界、中央奥には関東軍が作ったというコンクリート製の記念碑が倒されたまま晒されている。右手には卓上暦を模した３階建ての大きな陳列館。館内に入るといきなり『勿忘国耻』とあり、満州事変に関する多くの資料が展示されている。中国人にとっては忘れ得ぬ屈辱の歴史なのだ。15時58分、瀋陽駅着。これは旧奉天駅で、満鉄最大の駅として建てられ中国に対し力の誇示を狙ったと言う。……

防疫給水を隠れ蓑に ―― 関東軍７３１部隊

８月23日（金）の記録　……哈爾浜から南下して郊外の平房地区へと向かう。森村誠一氏著による「悪魔の飽食」等で実態が明らかになってきた秘密部隊・細菌研究所があるのだ。市街地を離れると、古い煉瓦造りの平屋建ての個人住宅が両側に現れてくる。９時44分、侵華日軍７３１部隊罪証陳列館に着く。丁度横浜日中友好協会の一行と一緒になった。嘗ての石井部隊の中枢部たる旧総務部棟が残っていた。関東軍防疫給水部と称して、裏では生物化学兵器の研究・製造をしていたのだ。今は中学校として使われている。校庭では何やら集団訓練が行われていた。薄暗い陳列館内は資料が乏しいが、人形模型を使っての生体実験や生体解剖などの悪行が告発されている。 3.000人もの中国人やロシア人捕虜が「マルタ」として命を奪われたのだ。時に、今でも、この部隊に拘わっていた日本人が懺悔の気持ちで当地を訪れ、当時の様子を証言するという。敗走の際、証拠隠滅のため殆どの建物は爆破されたが、強い陽射しの下、巨大な２本の煙突の立つ残骸が静まっていた。石碑には「動力班遺址」とあった。そして今も残る「マルタ」を運んだ引き込み線路の上を歩いてバスに戻った。

関東軍７３１部隊ボイラー室跡

13時03分、東北烈士記念館に着く。旧日本軍の特高警察本部だった建物だ。入口に「愛国主義教育基地」とある。抗日戦争で闘った人達の経歴や業績が、写真や遺品と共に紹介されており、日本人男女２人も含まれていた。他に旧日本軍の毒ガス

戦の犯罪も示されている。瀬戸内海に浮かぶ大久野島での毒ガス製造の様子もあった。今でも中国全土に不発弾が散らばっているのだ。……

中国の現代医療事情の視察？　とんだハプニング

8月20日(火)のことだった。私の腹が真夜中から騒ぎだした。ほぼ1時間おき明け方までに5回厠所へ通い、下腹部痛も伴う。結局6人が同じ症状で撫順病院へ。体温・血圧測定。問診に答えて「足の痺れなし、下腹部痛・吐き気少々あり、頭がボーッとしている。便6回。体温36.8℃」など。検査室で昔ながらの耳からの採血。採便の段になってびっくり、ボール紙製の薬の空き箱をただ単に広げたものの上に採れとのこと。流動状だ！流れないように凹こまして採れと言う。結果は伝染性の菌は発見されず。点滴のため最初は狭い部屋に詰め込まれたが、防疫部の責任者の指示で急遽トイレ付きの2人部屋に夫々が移され、真新しいシーツのゆったりベッド。急転直下の待遇の変化は何を意味するのだろうか。我々が撫順副市長の表敬訪問を受けるほどの賓客ゆえ、失礼があってはと判断したのだろう。

とんだハプニングのお陰で6人は、住民3.000人を虐殺した平頂山村、日本軍捕虜を“鬼から人”へ変えた戦犯管理所跡などの見学はできなかったが、中国の現代医療事情を垣間見ることができたと言える。

これからも郷愁を引きずって

8月21日、瀋陽市内に入った。地図でバスの動きを追う。柳条湖、北陵公園をまわり15時58分、確かに自分の脚で瀋陽駅（旧奉天駅）の前に立った。長春行きの列車を待つ一寸の時間に、瀋陽（旧奉天）を全身で感じ取ろうとする自分を意識した。ちょうど50年ぶりになるはずだ、懐かしい気がした。柳条湖、北陵公園も瀋陽市なのに、なぜか瀋陽駅で郷愁を感じた。時間に余裕があるならば、「鉄西区の旧興亜街はどの辺ですか」と案内してもらえただろうに。住んでいたという社宅のある旧満蒙毛織（現第一毛紡織廠）を訪れられただろうに。

でも、“まだ終わりのない旅”になって良かったような気がする。

長春へ・哈爾浜への車窓からの、どこまでも続く唐黍・高粱畑、そしてゆるやかな丘陵の黒い陰影の向こうにゆっくり没する『赤い夕陽』が、「満州」の広大さをジーンと感じさせた。生まれ故郷とは自分にとって何なんだろう。もの心がついてから聞かされてきた「満州」の、あの広大さがずっと気持ちの中を占めてきた。そしてこれからは、この広大さが、旧日本軍の残虐行為や「絶対に戦争をしてはいけないんです」と真剣に訴える中国の友人の顔とともに消えないことだろう。

前三ツ頭　登頂紀

１９６５年卒　　河合　武臣

八が岳清里の清泉寮に６年生の自然学校に引率して、権現岳２７１５ｍ途中の山である前三ツ頭２３６４ｍにこどもたちと一緒に登ってきた。以前までは、赤岳途中の牛首山に登山していたが、頂上からの展望がないので、今回、初めてこの山に変えたいきさつがあった。それで、私も初めての山であった。（３泊４日の中で、登山は大切なプログラムに考えられている。）
今回は、特にねんざの子がでて、苦労して降りてきた体験が思い出となった。

５月２８日はとてもよい天候に恵まれ、富士山、南アルプスの山々がはっきり見えるうれしい登山日和であった。
こども６０名、教師４名、アシスタント３名それに今回特別２名のガイドをお願いしての登山となった。宿泊場所の清泉寮からバスに乗って天女山まで約１０分位であった。９時１５分天女山の登山口を出発する。

ずっと続くカラマツ林は、まだ葉の色が黄緑でとても美しい。かわいい松ぼっくりをつけていて、こどもたちも、ひろってさわっていた。カラマツ林の下はクマザサが主で、そのほかいろいろな種類の下草が生えている。青いスミレや薄い紫色のハルリンドウは、可憐である。
カラマツ林にぽつりとまざって生えている低木で、紫色のミツバツツジは花盛りなのに、オレンジ色のレンゲツツジはまだつぼみだった。白樺の幹の白は、緑の色の中でひときは映えている。

はじめはなだらかな斜面を登って天の河原というところにつく。ここは、眺めがめっぽうよいところだ。しかし、しばらく歩いて２０００ｍを越えるぐらいになると登りもきつくなり、こどもたちは軍手をはめた手を使って登っていく。少し登っては休み、また登る。この繰り返しである。やがてこどもたちの質問が増える。「先生、あと何分で着くの？」「疲れた！。もうだめだ！」「先頭はまだ着かないの？」・・・・・・・体が続くか心配になるとひんぱんに聞いてくる。
「まだまだ」とか「「もうだいぶきたよ」とか「息をゆっくり吐いて」「少し歩いたら止まり、休んでまた歩く」など、はげましはげまし、休憩もとって、水分を補給しながら、繰り返し登り続ける。教師はトランシーバーで、こどもの様子など連絡を取り合い情報を交換しながら進む。遅れてくるグループがでる。そのグループと一緒にいく先生の担当を決めて進む。

具合の悪い子がでるとアシスタントとして依頼した養護の先生の出番である。こどもから様子を聞き、てきぱきと対処をしている。

やがて、やっと先頭の先生から、頂上に着いたとトランシーバーにて連絡が入る。まわりのこどもたちは、ふらついて登っていたが、そのことを伝えると、急に顔を輝かせ、元気をだして挑戦していく。
しかし、なかなか頂上につかない。いい加減くたびれた頃、頂上のほうから先に登ったこどもたちのはげましの声が聞こえてくる。「そこから、あと５分だよ。がんばって！」　その声に元気づけられ頂上に到達していく。

ところが、あともう少しのところで一人の子にアクシデントが起こった。ねんざで歩けなくなってしまった。養護の先生にどうするか相談を受ける。もう少しで頂上でそこで昼休みのお弁当なので、とにかくその子を上に上げることにした。大きな子だったので、おんぶして持ち上げるのに重かったが、少しずつ上げた。私が疲れたところで、養護の先生も女だてらにおぶるという。そのファイトには感心した。彼女もその子を背負って上に上げる。しかし、もう続かないとみて、２本の手と一本の足で這わせながら、頂上まで自力で到達させるのに成功させる。
　１２時５０分過ぎに頂上に到着したろうか。登り始めてから、３時間３０分位かかった。

すばらしい天気のせいで、頂上からの眺めはこれもすばらしい。富士山、南アルプス、中央アルプス、そして遙か遠くに、少し雪のすじを入れてそびえている木曽御嶽山が見える。また、赤岳の頂上付近がとがって少し見えている。しばし、景色を堪能した後、弁当を食べる。
まだ、到着しなかった最後の子たちが先生につれられて登ってくる。みんなで拍手や声を出して、その健闘をたたえる。登って、感激の涙。苦しさを乗り越えついに全員前三ツ頭２３６４ｍに到着する。実は、本当の目標は２２００ｍのところだった。先頭の先生が弁当を食べるには狭いと思って上に進んでしまったのであった。そのため、かなりきつい思いをさせたことになった。しかし、それだけに、すばらしい景色をみることができ、こどもたちも自信がついたことは確かなことである。
　班別に記念写真を撮る。頂上を示す木の看板は３つに割れて記念写真に入らなかったのが残念だった。

　一同、休んだあと班別に下山をする。私は、ねんざをした子のグループについた。
ガイド１人、教師３人、そしてこども６人が最後から降りていった。
どう降ろすかが問題だった。肩を貸して歩くが、ねんざの子は疲れてしまい長く続か

ない。私も初めての経験なので、答えがでない。背負って歩いたが、石ころのところですべってその子を落としてしまった。
痛い思いをさせたが、何とかしなくてはならないので、真剣であった。養護の先生が手をついて足を延ばして降りるようにいう。やってみるとなかなか良い。お尻で滑って降りるわけである。そして、下が石で痛いときは、手でお尻を浮かせて進むのである。ガイドが下からこどもの足を引いて降ろしてやる。こうすると一人で降りるよりずっと早い。ガイドも疲れるが、こどもも手足が疲れるので休み休みになり、降りるスピードも遅れる。登山道から離れるとクマザサがはえている。そこを滑って降りると楽に早く進むことに気がついた。本格的にササ滑りをするため、養護の先生のレインコートのズボンをかりてはき、クマザサ地帯に入り、滑って降りる。登山道を歩いて降りるより確かに早い、追い抜いてしまう。しかし、登山道から離れるので、残念ながらずっとは使えなかった。

登山道に戻ってから、みんなで荷物を持つように、この子の手足をもって降りる。お尻から落ちそうになるので、手を合わせあって組んでその上にみこしのように乗せて運ぶことを養護の先生が思いつき、さっそく実行してみる。
みんなで手を合わせ組んで乗せるときになって、ねんざの子がみこしになるのをいやがってしまった。ガイドがその子を説得し抱え上げて上に乗せる。
かけ声とともにかついで、歩き始める。決して楽ではないがこどもたちも手伝い、みんなで「よいしょ！よいしょ！」「みこしだみこしだ」などと、わいわい言いながらかつぐ。少し歩いて、私が前のほうをかついでいたが、石ころですべってズルッと転んでしまった。そのせいで、みんなもころんでしまい、みこしがこわれてしまった。みんな笑いながら起きあがると、上に乗せていた、ねんざの子がいなくなっている。はいずり回って下の方に逃げていくではないか。「みこしが逃げた！」といって、みんなで、そのおかしさに再び大笑いをする。

私のせいであっけなく、みこしは終わりになってしまった。また、その子はすべって降りる。ほかのこどもはこの道がよい、この石がじゃまだ、などとまた道づくりを始める。「なんと友達思いなのだ！」道を造ってやりながら、こどもが自分で言っている。自分で自分をほめるだけあって確かに献身的な働きであった。

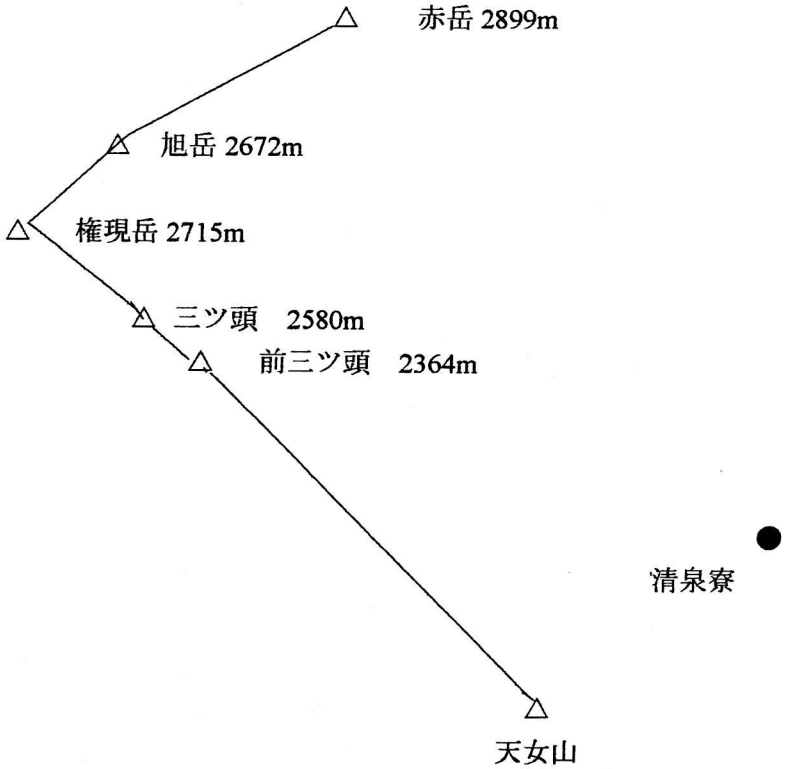
だいぶ降りてきて、斜面が緩やかになってきたところで、立ってよたよた歩けるようになってきた。体重をねんざの足にかけないため、杖をついて歩いてみることをすすめる。重傷でないため何とか歩ける。そのためみんな、ほっとする。

こうして、いろいろなことをしながら、みんなより、１時間ほど遅れ天女山駐車場に戻ることができた。明るいうちに到着できたのは幸いであった。けがの程度が軽かったのでそれが決定的だと思った。

バスは一度みんなを乗せ清泉寮まで送り、また迎えにきて、ずっと待っていてくれたのだった。先に着いた先生の手配であった。最後のグループだけでバスに乗り、清泉寮に５時３０分頃到着する。

いろいろ大変だったが、すべてのこどもが頂上まで行き、帰ってこれたことに満足している。天気がよく運も良かったからだと思う。

八ケ岳　前三ツ頭　概念図



探検部の思い出　小林剛

「思い出」なんて言うと何だか爺臭い。しかし、入学当時はまだ初々しい１８才、何の因果か５年も大学にいて、当時と比べると随分「おやじ」になった。三十路へ爆走する２３才の今、ちょっと大学時代を振り返って「思い出」に浸るのも悪くないだろう。

☆なぜ探検部に入ったか？

そもそも入学当時、探検部の存在など全く知らなかった。予定では、高校時代に引き続きバンドを組み、一方、冬季オリンピックで感動させられてしまったアイスホッケーをやる、これが大学の二大プランであった。将来の夢は、消防官になること。所属していた国際関係学科には、向学心溢れる輩が多く、つられて柄にもなく「勉学に励もう」と決意した時期もあった。世の中も自分も、単純で穏やかな回転を続けていた。そんな自分がなぜ探検部などに入ったのか。

入学当初、友達との付き合いでいろんなサークルを見て回った。入る部を既に決めていた自分にとって、冷やかし以上の気持ちはなかった。映画研究会、ハンドボール部、ライトハウスなどなど、硬式テニス部の説明会にも行った。同じクラスの女の子が、「みんないい先輩ばっかりね♡」と言うのを聞いて、「そうだね」などと答える一方、「どこがいい先輩じゃ！」と、さわやかなテニス部員にむかついたこともある。探検部もそんな感じで訪れた一つだ。

部室には佐々木氏と穂積氏がいた。雁首そろえた新入生を前に、穂積氏がやや緊張の面持ちで、探検部の説明を始めるも、反応はいまいちである。ちょっと困った穂積氏は「佐々木さんも何か言って下さいよ」と助けを求めるが、佐々木氏はバットを握ったまま、大きい目をギョロギョロさせるだけであった。そんなときに部室に現れたのが藤本氏だ。ほっとした表情をした穂積氏は、「藤本さん、いいところに来た。新入生です。何か話ししてやって下さいよ。俺、授業があるんで」と言って、そそくさと、部室から出て行った。「何！お前ら探検部入りたいの？」と、腰をくねくねさせながら、藤本氏のハイパーテンションな説明が始まった。ちょっと圧倒されながらも、「この人、面白い人（変な人）だな～」と思った。

誘われるがまま、友達二人とともに部会に出る。当時女子部員のいなっかった探検部に、なぜかその日は二人の女性がいた。部員の注目は、新入生よりも、その二人に向けられていた。そのせいか、部会の後に飲みに行くことなる。自分を誘った友達は二人とも「用事がある」と言って帰ってしまった。新入生一人、少し心細い気持ちの自分に、面倒見のいい穂積氏が、探検部についていろんな説明をしてくれた。

女性の一人がしこたま酔っ払ったため、飲み会は乱痴騒ぎのようにな

った。狼と化していた吉見氏が、その女性に抱きついて、胸を揉んでいた。呆気にとられて眺めていた自分に吉見氏が「おいっ！お前も揉め！」と叫ぶ。当時童貞の１８才、「いいんですか？」とうろたえる自分に、「いいんだよ！早く揉んじゃいな。俺も！」と叫ぶ藤本氏もまた、その女性に飛びかかって行った。そんな感じで、自分もいつしかその輪に加わっていたのだが、残念ながらその感触は、もう手に残っていない。「犯っちまえ！！」とか何とか叫ぶ吉見氏のかん高い声が、耳目に残るばかりである。

ほろ酔い気分で八景駅に戻る途中、「探検部に入ると、いつもこんないいこと、できるんですか？」と間抜けな質問をする自分に、藤本氏は答えた。「おう！これでお前も、探検部入るの決まりだな！」。そんな感じで、自分の入部は決定された。まあ、始まりというのは、えてしてこんなものだ。

というのは、まあ余談であって、探検部を続けて行こうと思った本当の理由は、活動そのものよりも、部会が無茶苦茶面白かったからである（最近の部会は割りとつまらなくて、ちょっと寂しい）。特に藤本氏と立木氏の奇抜な発想には、涙が出るほど笑わされた。そして大きな夢（妄想？）を語る探検部員に憧れた。

☆合宿について

合宿にいった回数を数えると４７回だった。登山１５回（うち冬山８回）、沢登り１０回、川下り８回、ロッククライミング６回、山スキー２回などなど。あえて面白かった順にベストテンを作ると以下のとおり。

①チュルー遠征～唯一の海外遠征。一カ月にもわたる合宿で、案外、登山活動中よりも、トレッキングルートの牧歌的な風景や、カトマンヅの喧噪の方が、心に残っている。その結果に涙した唯一の合宿

②無人島～何もすることなく、心体を解放した２０日間。台風、マージャン、オナニー教、巨大ウナギ、夕立、ウツボ、オナガ浜、ユゴー、鼠、ビートルズ、高校野球、満天の星空などなど

③天塩川川下り～初めての夏合宿、何もかもが楽しくて仕方がなかった。変な言い方だが、ある意味、自分にとって探検部で一番幸福な時代ではなかったか？

④竹の沢沢登り～高井・平塚が滝壺に落ちたとき、あの絶壁の上で進退窮まったとき、二回も、リーダーとして隊員の家族に謝りに行く光景が、脳裏に浮かんだ

⑤（第二回）上の廊下～激流に流されたり、台風の直撃を受けたりした一回目の雪辱を晴らせたせいか、成功の充実感が最も高い合宿の一つ

⑥北岳バッドレス～一年のときに見て圧倒された、あの巨大な壁に登れ

るとは、正直思ってなかった
⑦釧路川川下り～朝もや、紅葉、馬、川下りの魅力は何もしないところにあるのではないか
⑧立山山スキー～五月の連休を襲った嵐のお陰で、ひどい目に遭った。どうもこの頃から、長時間行動が多くなる
⑨風蓮川川下り～自分が行った合宿の中で一番の秘境がここ
⑩知床縦走～知床岬から見た、青い海、お花畑、伊吾田ソング大ヒット

日数、人数ともに多い合宿が、やっぱり心に残る。冬山は回数が多い割には、印象が薄い。どうも寒々しい風景ばかりが、思い浮かぶ。合宿の記憶には、フィールドだけでなく、初めて訪れたその土地の風土、街の風景などが入り交じっている。北海道での合宿が多くランクインするのも道理である。

次はおっかなかった合宿のベスト５。
①白馬山スキー～二度滑落する。児玉氏はただ笑っていただけであった。
②（第二回）谷川ロッククライミング～墜落の記憶が生々しい
③竹の沢沢登り～肉体的よりも、リーダーとして、精神的に参った
④（第一回）三ツ峠ロッククライミング～初の合宿、とにかく怖かった
⑤（第一回）八ヶ岳北峰リッジ～初の冬山バリエーションルート

ザイルを使う合宿には、おっかない記憶が付きまとう。特に一年のころはそうだった。探検部での一番最初の活動が、三ツ峠。吉見氏にあの壁を登ると言われたときは、「冗談だろ」と思っていた。登っている途中は、「もう二度と高いところには登らない」と決心したものだった。

☆探検部の人

探検部の記憶は、活動の記憶であるとともに、人の記憶でもある。暇に任せて、誰と一番一緒に合宿に行ったか数えると、やはり同学年の伊吾田氏であり、２４回、二番目がなんと佐藤氏ではなく、松林氏で２２回、佐藤氏は三番目で１９回である。特に三年以降は、いつも伊吾田氏と松林氏とともに、合宿をやっていたような感じであった。あと特筆するならば、一年のころは、よく藤本氏にあちこち連れて行ってもらった。穂積氏とは、いろいろ計画を考えても、実現しないことがなぜか多かった。川下りと言えば、天塩川で三連結の京急隊を結成して以来、よく小森氏と立木氏のお供をした。下の学年の者とはあまり一緒に合宿に行かなかったが、竹の沢を共にした平塚氏、金子氏、高井氏が印象深い。平塚氏はとにかくピーチクパーチクよくしゃべる。高井氏は宇宙人のようで、金子氏と言えばやはり自転車である。

まあそんな感じで、皆様お世話になりました。

☆結論

とりあえず探検部の５年間、非常に楽しかった。

会員近況紹介

禅洲　茂（1970年入学）

サラリーマンの宿命で、忙しく毎日を過ごしています。

高梨　洋之（1985年入学：自衛官）

4/6～4/26まで集合訓練で呉・佐世保へ行くため、残念ながら（総会に）参加できません。皆様によろしくお伝え下さい。

宮崎　捷二（1961年入学）

今夏、インドヒマラヤスピティー地区にあるチャウチャウカンニルダ山に遠征する予定で、合宿が入り（総会に）出席できません。みなさんによろしくお伝え下さい。

遠征もラストチャンスかなあ？

折井　亮夫（1964年入学）

不自由になってしまった身体をひきづりつつ通勤する日々です。駅の階段の登り下りは山登りの如くですが、一歩一歩踏みしめつつ頑張る日々です。

探検部の心得がこんなところで生かされています。

三浦　茂（1969年入学）氏の妻

いつもお世話になりありがとうございます。たまには親子連れキャンプ等を企画して、「パパの昔取った何とやら…」を見せて欲しいです。

吉見　敦司（1989年入学：黄柳野塾主催）

４月の末にスタッフと塾生で出資して、「(仮称)子供有限会社」を設立します。日本一あぶない会社の経営者です。あぁ…。

野口　道章（1977年入学：富士ゼロックス勤務）

小森さんも大阪に転勤となりましたが、私もいい加減転勤したいです。

児玉　亮（1990年入学）

探々会通信とてもおもしろく拝見しています。小嶋さんが“ネシア”に行かれるとは…。また集まる機会があるといいな。

佐藤　修史（1987年入学）

４月～６月には（朝日新聞）大阪本社で働きます。吹田市の寮に滞在しています。

伊藤　源（1989年入学）

相木（田村の内縁の妻）が出て行ったそうですね。また寝場所にさせて下さい。

浅香　辰也（1983年入学）

昨年、ブラジルに３ヶ月間出張してきました。出張の合間にアマゾンを旅行したのですが、思わず「このまま住んだろうかな」という思いにかられました。

伊吾田　宏正（1992年入学）

昨年度一年間は斜里町知床自然センター管理事務所において、ヒグマ等の生態調査補助研究員として牛馬の如く働いておりました。今年度は北海道のエゾシカ研究プロジェクトの一員として、阿寒に張りつきつつ、今年こそは念願の大学院に入学するため、受験勉強をします。今年度の身分は単なる失業者です。トホホ…。

総会は参加したかったのですが、4/7 にはまた北海道に行かねばなりません。また、皆と飲みたいのですが時間がとれませんので、次の機会にお誘い願います。

紙村　徹（1967年入学：神戸市看護大学勤務）

神戸市側の事務局の官僚制的形式主義と闘争中。

佐藤　栄宏（1992年入学：大分合同新聞勤務）

引っ越し手当も出ない会社と気がついた時は遅く、借金をつくってしまった。立木先生をみて(注)、社会人になったら富豪になれると思っていたのに。

世の中そんなに甘くなかった。

注）北海道新聞に勤務中の立木大造(1990年入学)が、「ススキノで豪遊している」と吹聴しているのをみて。

小森　享二（1968年入学）

月に一回ぐらいは出張で東京に帰っていますが、総会の時期はタイミングが合わず、帰れそうにありません。

師井　佳子（1983年入学）

ふだんは子供相手の仕事で忙しくしていますが、去年の４月から週一回、汐入の気功教室に通っていて、潮風をあびるのがよい息抜きとなっています。

八景名物のワラブキ屋根、今ふき替えていますネ。

松林　孝憲（1993年入学）

私は今、大阪で真面目にサラリーマンをしております。この地での私の住いは、六甲にほど近い所にあり、早速岩場巡りや山登りに行って来ました。近いうちに、奈良・伯老日大山の方面にも足を向けたいと思っています。

もちろんこれは、息抜きと、来るべき遠征に向けてのトレーニングでもあります。

横浜市立大学探検探査の会 総会報告（1997年度）

１．会計報告（1996年4/1～1997年3/31）

・収入＝¥230,399　支出＝¥99,655　収支計＝¥130,744（詳細は別紙参照）

前年度は会費納入の督促状を送付したため、会費収入が10万円強と好調であった。また、繰越金（1995年度は会の活動が活発でなかった）やトムール登山隊報告書販売収入等により、収入の合計が20万円以上となっている。

支出は、古い官製ハガキや年賀状等（探検部部室に大量に眠っていた）を換金したり、職場のコピー等を使ったりして倹約した結果、なんとか10万円弱に抑えられた。しかし、前年度の会費収入との収支でみると、実質的な黒字額はごく僅かである。

２．会員の構成について

本会の実状は、探査会、探検部のＯＢ組織であるにも拘わらず、現役の探検部員が探検探査の会の会員を兼ね、会費を徴収（年額千円）されているのはおかしいとの指摘があった。

本会の発足当初は、会計や案内の発送等の事務作業を現役部員の人海戦術でまかなわざるを得なかったことから、現役を会員に仕立て上げ、労働力を利用していたという感は否めない。

現在は事務作業の合理化も進み、ＯＢだけで会務を全うできる状況になったこと等により、現役探検部員を本会の構成員から外すことは何ら問題がないとの提案がなされ、賛成多数により決議された。

なお、今まで現役部員が支払ってきた会費は、納入率がきわめて低いことから、「未納者に対しては過去にさかのぼって徴集しないが、納入者への返還もしない」ことになった。

但し、探検部と本会の友好関係は今後も継続していき、本会の会合には現役の部長、副部長クラスの人間が参加し、現役の活動に対しては本会のメンバーが、技術指導、資金援助、情報提供等を行っていくという取り決めが交わされた。

３．会長、幹事の改選について

今回、大野会長をはじめ、何人かの幹事から役職を降りたいとの意志表示があった。会長の交代問題については、以下のような意見が出された。

・会長はあまり変わるべきではない。

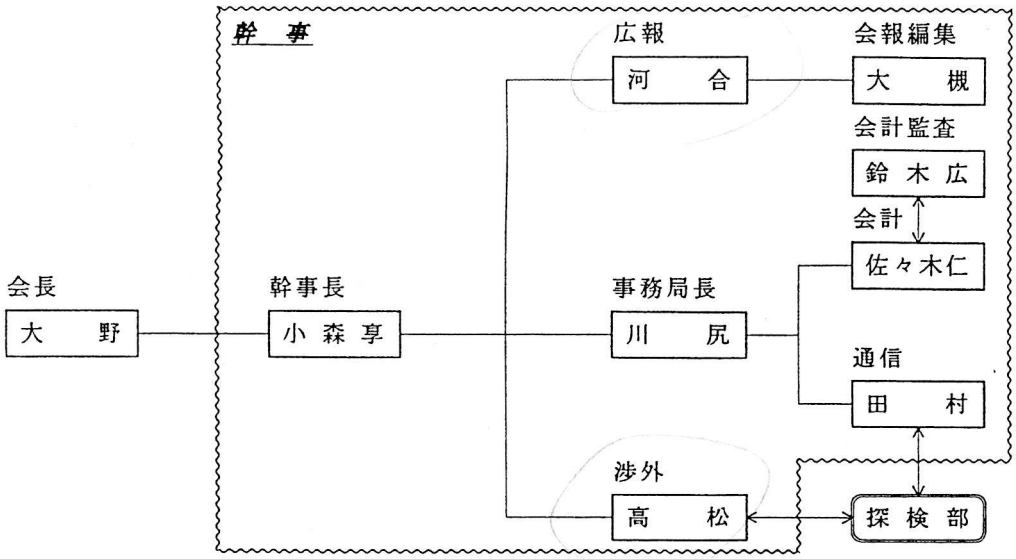
・会の構成・性格上、長老格で世間的にも名前のとおった人間が会長を務めるべき。

・通常の会務運営は東京近辺在住の若手会員等で十分可能なため、会長が地方在住でも構わない。

議論の結果、本人に不都合がない限り、大野氏に引き続き会長職を引き受けていただこうということになった。

但しその場合、「大野氏の上京のタイミングに合わせ、会合等をセッティングする」、「大野氏不在の場合の会合結果等は、極力早く報告する」、「高知もしくは大阪あたりで会合を開催する」等の配慮が必要となる。

幹事については、「実際に動いている人間を位置づけよう」という方針のもと、以下のように決定された。



4．会費の見直しについて

現役の切り離しに伴い、会員が減少（17名）したこと、今後活動の活発化によって通信費等の増加が予想されること、消費税が5％にアップしたこと等により、今年度から現行の年2千円を3千円に値上げする。会費の徴収に際しては、以下のような対応をとるものとする。

・一括納入により、今年度以降の会費を先行して納めている会員については、追加徴収しない。

・会費を滞納している会員については、過去にさかのぼり年額3千円を徴集する。

なお、従来実施してきた「3年間まとめて払うと千円引き」の特典は廃止する。

5．会則の変更について

2．～4．の決議に伴い、会則の該当部分を変更する（会則は後日送付）。

6．創立40周年記念集の制作について

・主　　催：横浜市立大学探検部と探検探査の会の合同事業
・タイトル：「EXPEDITION ～創立40周年記念集～」
・体　　裁：Ａ５版、グラビア8P、本文300P（原稿収集状況等によっては変更有り）
・内　　容：活動年譜（1958～1998）、現役当時の活動記録等再掲、書き下ろし（論文、紀行文、エッセイ等）、探査会・探検部の歴史総括（座談会形式？）
・費　　用：上製本で300部刷った場合、節約すれば100万円強で出版可能（下記見積参照）。費用は原則として、会費以外のカンパ、記念集の販売等により賄う。
・編集委員：編集委員長＝田村（探々会）、副編集委員長＝平塚（探検部）。また編集委員は、概ね10年毎に２～３名ずつが担当する。
・ｽｹｼﾞｭｰﾙ：５月末に原稿募集、カンパ依頼。12月末原稿締め切り。1998年１～３月に編集、制作、印刷。1998年４月の総会にあわせ発行。
・進捗状況：探検部部室に保管してある過去の活動計画書、報告書、部誌、スクラップ等をデータベース化し、パソコンに入力済み。

概算見積

Ａ５版本文300頁上製本(ｶﾗｰ8P)		数　量	単　価	小　計
①	表紙カバー制作費	1	10,000	10,000
②	表紙制作費	1	10,000	10,000
③	本文入力費（校正含む）	300	6,000	1,800,000
④	地図トレース費	20	8,000	160,000
⑤	写真スキャニング費	70	2,000	140,000
⑥	フィルム出力費　カバー	1	6,840	6,840
⑦	表　紙	1	3,610	3,610
⑧	本　文（カラー）	8	4,560	36,480
⑨	本　文（Ａ　２）	36	6,840	246,240
⑩	本　文（Ａ　４）	2	1,900	3,800
⑪	面付け費（８面）	288	300	86,400
⑫	面付け費（４面）	32	300	9,600
⑬	面付け費（２面）	4	300	1,200
⑭	印刷及び製本費（300部）	300	2,200	660,000
①～⑭（印刷屋に丸投げ）				3,174,170
①～②、④～⑭（入力のみ自前で作業）				1,374,170
⑥～⑭（ＤＴＰ版下を自前で作成）				1,054,170

株式会社パルシングオー

7．その他提案事項等

・次年度以降の会の事業として、山小屋建設を掲げる。
・その準備作業として、今年は建設候補地の選定を行う。
・本年10月頃、予定地の一つである奥日光（森林組合の土地を使用可）で、下見を兼ねたキャンプを行う。

8．出席者

・河合、高松、三浦茂、大槻、田村、佐藤修、佐々木仁、稲田、穂積、平塚、戸田、関口
（委任状を含め、全会員の１／３に達したことから総会成立）

1995年度　探検探査の会　会計収支結果

（1995年４月１日～1996年３月31日）

収　入

◆前年度繰越金	61,045
◆会　　費	56,000
◆利　　子	506
◆小　　計	117,551

支　出

◆郵　送　料	15,120
◆ハ　ガ　キ	6,750
◆コ　ピ　ー	3,680
◆文　　具	4,792
◆小　　計	30,342
◆　収　支　計	87,209

1996年度　探検探査の会　会計収支結果

（1996年４月１日～1997年３月31日）

収　入

◆報告書収入等	36,000
◆前年度繰越金	87,209
◆会　　費	107,000
◆利　　子	190
◆小　　計	230,399

支　出

◆郵　送　料	40,340
◆コ　ピ　ー	1,400
◆文　　具	3,738
◆会　議　費	13,600
◆会報印刷費	40,000
◆そ　の　他	577
◆小　　計	99,655
◆　収　支　計	130,744

（会計：田村康一）

編集後記

５号の発行が遅れてお詫びいたします。遅ればせながらお届けいたします。
原稿を寄稿してくれた会員のみなさん有り難うございました。
次号にも、多数の寄稿があることを期待しています。
みなさんの健康と活躍をお祈りいたします。

探検・探査　　第５号

発行年月日　　１９９７年６月２０日

発　行　者　　横浜市立大学
探検・探査の会

代　　表　　大野　正夫

編　　集　　探検・探査の会 編集委員会